津田左右吉物語

第14回

平泉での暮らし

昭和20年6月、日増しに激化する東京の空襲を避けて、左右吉は教え子千葉真幸の案内で岩手県平泉村に疎開しました。左右吉は5年間を平泉で過ごしています。終戦直前の混乱で、平泉行きは極度の交通難のなかでした。弟子らは左右吉の荷物を風呂敷に包んで背負って、東京駅まで見送りました。

左右吉は、都内の騒がしい環境とは違い、静かで研究に専念できる平泉をとても気に入りました。昭和21年の『論語と孔子の思想』刊行を始め、25年に東京へ帰るまでに著作10篇、論文発表5回、講演会3回など精力的に活動しました。第5代早稲田大学総長・歴史学研究会長・文部省歴史科専門委員など要職への就任要請を、研究に専念したいという理由で左右吉はいずれも辞退しました。

昭和24年に文化勲章を受賞し、26年には第1回文化功労者に。平泉での5年間は、左右吉が「研究室の人」から「マスコミの話題の人」となった時期でもありました。

▲平泉小学校にて